

## 外来鳥類ガビチョウが在来鳥類に与える影響について

On the influence of *Garrulax canorus* on traditional birds

山崎 法子 (Noriko Yamazaki) 指導：三浦 慎悟

## 1. はじめに

ガビチョウ *Garrulax canorus* は中国・東南アジア原産のスズメ目チメドリ科の鳥類である。高度経済成長期に飼育目的で輸入されたが、やかましい鳴き声などから人気は出ず、事故または故意に逸出した本種が近年日本で分布を拡大させている。2000年頃に環境省によって行われた調査では福島県や関東、九州北部の一部に定着が確認されていたが、民間主導で2016年から行われている同様の調査では関東と福島の分布が繋がり、九州でも分布が拡大していることが判明した。このことからガビチョウは今後も西日本を中心に分布を拡大していくことが予想される。

また、生息環境が似ているウグイス *Horornis diphone* との間に強い競合は確認されていないが、所沢キャンパスで初めて本種が確認されたのは2002年であり、16年が経過している。そのため世代交代を経た種間の関係を改めて確認する必要がある。そこで本研究ではガビチョウの生息状況を明らかにするとともに、ウグイスと本種の営巣をめぐる空間利用の違いについて考察した。

## 2. 調査地および調査方法

調査地は早稲田大学所沢キャンパスを中心とした狭山丘陵の一部とした。狭山丘陵は東京都と埼玉県にまたがる東西約11km南北約4kmの独立した丘陵地である。所沢キャンパスはA地区とB地区に大別されており、A地区は研究棟や運動場がある施設側であるのに対して、B地区は里山林と放棄水田跡からなる湿地帯を擁している。

調査は所沢キャンパスと狭山丘陵に約3kmのルートを設定し2018年3-7月にかけて活動点を記録し、テリトリーマッピングを行った。またB地区においては2016-2018年の3年間にわたり営巣調査を行った。加えて、自然環境調査室よりB地区で行ってきたセンサスデータ約20年分を借用し、ガビチョウ個体群の変遷を分析した。

## 3. 結果

テリトリーマッピングの結果から、ガビチョウとウグイスの平面的なテリトリーは、繁殖前期では重複することが多いが、後期はすみ分けていく傾向が認められた。観察中もソングポストが同じ木であったり、数メートルしか離れ

ていない場所で交互にさえずりあったりする行動を確認した。営巣調査の結果からは両種が営巣している樹木は異なっており、空間利用には差異があることが示唆された。

自然環境調査室のデータから、2001年以降ガビチョウとウグイスはどちらも増加傾向にあるが、ガビチョウは2006年から顕著に増加していた。両種とも7月に出現割合がもっとも高まるが、2002-2005年のB地区ではガビチョウはほとんど確認されていなかったため、本格的に繁殖が開始したのは2006年以降であると考えられた。なお、2018年7月にはガビチョウが大きく減少しているが、これはB地区の整備が進み、ガビチョウが選好する下層植生の発達した環境が減少したためと推察された。

## 4. 考察

ガビチョウが所沢キャンパスB地区に侵入して約15年経過したが、営巣環境の違いや近距離でさえずりあっても攻撃的な相互作用などが起きないことから現在も強い競合は存在していないと判断される。しかし繁殖前期ではテリトリーの相互重複が発生するものの、後期になるとその重なりが解消される傾向が認められた。このことから、ガビチョウの増加はウグイスの繁殖に一定のインパクトを与えているのは確からしい。この可能性は定着した当初から指摘されていたことであり、B地区では両種とも増加しているが、両種を支えるほどの餌資源がない環境ではウグイス等の在来鳥類が追いやられてしまう可能性がある。

所沢キャンパスで2002年に姿を確認されているが繁殖開始は4年後の2006年からと考えられることからガビチョウは移入から定着までにはズレがある可能性がある。また下層植生を刈り払う等の整備を行うと短期間のうちにガビチョウの出現割合が低下していることから、移入初期であれば適切な管理をすることでガビチョウの定着と繁殖を防ぐことができると考えられる。

今後ガビチョウは関東とは環境や鳥類相が異なる西日本に分布を拡大していくと予想される。関東ではウグイスをはじめ在来鳥類群との激しい競合は確認されなかったが、西日本でどのような影響が起きるのかは予測できない。ガビチョウの分布拡大を防ぐには、定期的なモニタリングとともに、生息地の刈り払いなど環境を整備することが必要である。